

令和6年度 第1回 長野県立美術館協議会

日 時：令和6年7月30日(火)
14時00分～

場 所：長野県立美術館
レセプションルーム

1 開 会

○黒岩芸術文化係長

ただいまから「令和6年度第1回長野県立美術館協議会」を開会いたします。本日の進行をさせていただきます長野県文化振興課芸術文化係長の黒岩と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の協議会は、傍聴希望の方、報道機関に公開で開催しておりますので、御了承くださいますようお願い申し上げます。

それでは初めに、文化振興課長も水上俊治から御挨拶を申し上げます。

2 主催者あいさつ

○水上文化振興課長

文化振興課長の水上でございます。

本日は、大変御多用のところ、長野県立美術館協議会に御出席をいただきまして誠にありがとうございます。

この4月に県の組織改編がございまして、これまで教育委員会が担っておりました文化財行政が知事部局に移管されまして、他の文化芸術施策と一体的に推進しますとともに、様々な県の施策とも連携を充実・強化するという観点から、新たに私どもの文化振興課が発足いたしました。県立美術館につきましても当課が所管させていただくことになりますので、よろしくお願いいたします。

さて、当美術館につきましては、令和3年4月に長野県立美術館として新たなスタートを切りましてから3年4か月が経過しております。整備基本計画にうたわれた理念であります人本位で運営する開かれた美術館に基づきまして、テーマ性を持った企画展の開催や、信州ゆかりの作家の紹介事業に取り組みますとともに、学びの場や交流の拠点として、これまでの施設利用者数は約238万人に上っております。

4月からは、新たに隣に座っていらっしゃいます笠原美智子館長をお迎えいたしまして、一層皆さんに親しんでいただける美術館となるよう、県、それから指定管理者である長野県文化振興事業団と共に美術館の運営に取り組んでまいります。

本日は、委員の皆様それぞれのお立場で、様々な視点からの御意見、御助言をいただきまして、今後の美術館運営の向上を図ってまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

○黒岩係長

続きまして、長野県立美術館館長、笠原美智子から御挨拶を申し上げます。

○笠原館長

皆様、笠原です。よろしくお願いいたします。

本日はお忙しいところ、お足元の悪いところ御参集いただき、本当にありがとうございます。

4月から館長を務めさせていただいていますが、本当に夢にも思っていなかったところ です。外部から本当にきれいな風の通る美術館だなと思っていました。当時どこの美術館も予算が削られているところを、長野県は中でもかなり頑張っているんじゃないかなと思っていました。

何回も言いますが、本当に夢にも思わなくて、4月にこの職をいただきまして、この3か月でいろいろな関係者の皆様、一人一人の職員のヒアリングを丁寧にやってきました。やはり外から見ていたのと内から見るのとではえらい違いだと感じています。特に人事関係、予算関係、それから海外への研修なども必要と思っています。それから、これだけインバウンドがいらっしゃってくださっていますので、そういった人たちを狙って広報し、お客様として来ていただくかだとか、解決すべき問題は山積していると思います。

私は学芸員を約30年やってきましたので、現場の者としては、皆様の意見というのは励みになります。厳しい言葉でも本当に励みになりますので、本日はぜひ忌憚のない御意見を伺いたいと思います。

よろしくお願いいたします。

○黒岩係長

初めに、委員の交代について御報告いたします。

3月末付で林明晋委員が退任し、4月1日付で若麻績享則委員が就任いたしましたので御報告します。

大変恐縮でございますが、若麻績委員から自己紹介をお願いいたします。

○若麻績委員

皆さん、こんにちは。ただいま御紹介を賜りました善光寺の寺務総長を4月から拝命しております淵之坊若麻績と申します。この会議、2年前にも関わっていたものですから、コロナ中でありましたけれどもお世話になった記憶がございます。久しぶりに帰ってまいりまして、ただいまという感じです。どうぞよろしくお願いいたします。

○黒岩係長

ありがとうございました。

なお、本日金井委員はオンラインにより出席しております。また、鈴木委員は所用により欠席をしておりますので御報告いたします。

美術館、文化振興事業団、長野県からの出席者は、配付した名簿のとおりでございます。

それでは、会議に入る前に会議資料の御確認をお願いいたします。

事前に配付いたしました次第、委員名簿、出席者名簿、配席図、資料1「長野県立美術館の概要と事業運営」、資料2「令和5年度第1回美術館協議会でいただいた御意見に対する対応状況」、あと美術館のパンフレットをお手元に配付しております。不足等がありましたらお申し出ください。

それからお願いでございますが、当協議会の会議録を県のホームページに後日掲載することになっております。会議録作成後、各委員の皆様には御確認をいただきたいと思っておりますので、その節はよろしくお願いいたします。

3 議 事

(1) 令和5年度事業報告及び令和6年度事業計画について

(2) 令和5年度第1回美術館協議会でいただいた御意見に対する対応状況について

○黒岩係長

それでは、議事に入らせていただきます。

議事進行につきましては、会議の招集者である県文化振興課長が務めさせていただきます。それではよろしくお願いいたします。

○水上文化振興課長

それではよろしくお願いいたします。おおむね終了時間4時を目途に議事を進めさせていただきます。

まず、議題を一通り御説明した後に、質疑、意見交換に入りたいと存じます。

最初に議題(1)の令和5年度事業報告及び令和6年度事業計画について、美術館から説明をお願いいたします。

○堀内副館長

「長野県立美術館の概要と事業運営」という資料1を御覧いただきたいと思います。

資料の1ページを御覧いただきたいと思います。

「Ⅰ 長野県立美術館の概要」でございます。

当館は、開館をして4年目となります。「1 沿革」「2 施設の概要」「3 運営方針」につきましては記載のとおりでございます。

「4 収蔵作品」につきましては、本館コレクションと東山魁夷館含めまして5,729点所蔵をしております。前回令和5年度よりも126点増えております。令和5年度に松澤宥氏の作品や、小山利枝子氏の作品を9点購入させていただきました。また辰野登恵子氏の作品以下117点の寄贈をいただいたところでございまして、126点収蔵作品が増えているところでございます。

次の2ページを御覧いただきたいと思います。

「5 組織体制」でございます。こちらの(2)の職員体制でございますけれども、正

規職員が昨年12名から今年は15名ということで、学芸員が欠員になったところの補充であったり、広報・マーケティング室を1名増員しまして、正規職員が3名増となっております。全体の職員数は32名で変更はございません。

また、「6 施設利用者数」を御覧いただきたいと思います。令和6年6月30日現在ですが、今年度はこの3か月で10万5,612名の方に来ていただいております。今年は企画展のところですが、春陽会展といった自主事業展をこの春から開催しております、入館者、利用者の数が少ないといったところでございます、その影響があり、無料ゾーンへの入館者が少なくなっているところでございます。今後企画展等が幾つかございますので、そういうところで利用者数の増加を図っていきたいと考えています。

3ページ以降が事業運営となります。それぞれ関係の課長・室長から説明をさせていただきます。

○霜田学芸課長

引き続きまして、「Ⅱ 事業運営」「1 令和5年学芸事業実施状況」を御説明させていただきます。学芸課長の霜田でございます。

令和5年学芸事業実施状況でございます。

最初に(1)鑑賞事業ということで、まず企画展でございます。

この令和5年は企画展を全部で5本開催いたしました。

企画展1といたしまして、「超絶技巧、未来へ！ 明治工芸とそのDNA」、これは4月22日から6月18日まで、展示室2・3、2階の会場を使用して実施しました。超絶技巧を駆使した明治工芸の名工の作品に加えて、そのDNAを受け継ぐ現代作家の新作を中心に超絶技巧の世界を紹介しました。

これは巡回展ということで、信越放送(SBC)さんとの共催展という形で行っております。イベントとしまして、講演会2回、ワークショップを1回ほど実施しております。

企画展2といたしまして、「葛飾北斎と3つの信濃～小布施・諏訪・松本～」こちらは日程が7月22日から8月27日まで、展示室1・2・3、全館を使いまして展示をしました。こちらは信濃毎日新聞さんとの共催展ですが、こちらは信濃毎日新聞創刊150周年記念ということで大々的に行ったものです。

「富嶽三十六景」全46図をはじめとする錦絵の各揃物や貴重な摺物、美人画、花鳥画など、北斎画業の全貌を紹介しながら、北斎芸術の代表作である上町及び東町祭屋台の天井図や岩松院の天井絵「鳳凰図」関連作品、また、諏訪湖や諏訪高島藩の家老の肖像画等、北斎と諏訪、あるいは北斎と松本といった関係、足跡をひもとく展示でございました。

こちらは北斎館の館長である安村敏信さんが監修で、北斎に関わる北斎館、すみだ北斎美術館、日本浮世絵博物館、諏訪市博物館、こういった美術館・博物館と連携しながら開催したものでございます。

続きまして、企画展3、「とびたつときー池田満寿夫とデモクラートの作家」、9月9日から11月5日まで、展示室1・2・3を使用いたしました。

長野で青年期を過ごしたマルチ・アーティストの池田満寿夫、その池田が交流を持ち影響を受けたデモクラート美術家協会の作家たちの作品を、当時の日本の様々な版画を中心に、開催館各館の所蔵品を中心として振り返ったという展覧会でございます。

こちら和歌山県立近代美術館、広島市現代美術館、宇都宮美術館、そして当館ということで4館を巡回した展覧会となっております。こちらはこの4館の学芸員が打合せをしながら、共同で企画を立ち上げたということになっております。展示室1・2・3を使って、当館は池田満寿夫の版画のパーフェクトコレクション収蔵しておりますので、そちらの収蔵品の意義を再考した展覧会となっております。

続きまして企画展4「庵野秀明展」。こちらは11月25日から2月18日まで、展示室1・2・3を使いまして実施されたものです。総監督を務めた『シン・エヴァンゲリオン劇場版』が興行収入100億円を超える大ヒットとなりました庵野秀明さんの貴重な原画、アマチュア時代から現在までのメモやイラスト、イメージスケッチ、画コンテ、レイアウト、ミニチュアセットに至るまで多彩な制作資料を余すところなく紹介したものでございます。

こちらは第一展示室の会場の様子でございますけれども、いろいろな模型等も非常に立体的に庵野秀明さんを紹介するという展示になっております。かなりやはり好きな男性のお客様が多かったのではないかと印象を受けたところです。

続きまして、企画展5「春陽会誕生100年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助」という展覧会で、こちらは今年度までかかっておりますけれども、3月16日から5月12日まで、展示室1・2・3を使った展覧会となっております。

1922年に設立された春陽会の誕生100年を記念する展覧会で、日本の近代美術史における春陽会の意義を再考したものとなっております。岸田劉生や萬鐵五郎、木村莊八、長谷川潔等々、草創期から1950年代頃にかけて活躍した画家の作品を中心に展示をいたしまして、こちらは東京ステーションギャラリー、栃木県立美術館、碧南市の美術館と当館ということで、やはりそれぞれの美術館の学芸員が集まって企画を共に立てて巡回をしたという展覧会となっております。

以上が五つの企画展でございます。

続きましてコレクション展ということで、常設展示としまして、当館の本館コレクション展示室では、「NAM コレクション 2023」という名称で6回に分けて展示をしております。今回の各会期同時に開催している企画展との連動企画、企画展のテーマに沿ったコレクション等の展示を行いよりテーマを際立たせたような展示を実施してまいりました。

また、第Ⅲ期におきましては、当館の教育普及係が企画・立案をしまして、絵画の見え方、丸、三角、四角から作品を見るというような新しい観点からのコレクション展示を目指しております。

また新収蔵品展は、昨年度収蔵した作品をお披露目する機会となりまして、新収蔵品展として、第1展示室で4月22日から6月18日まで。これは先ほどの超絶技巧展の期間と同じですが、この期間に新収蔵のお披露目展を行っております。

続きまして、東山魁夷館でございます。東山魁夷は本制作36展を5期に分けて習作・スケッチなど特色あるコレクションを最大限活用した展示内容としてございます。

それから、移動展・交流展でございます。

移動展というのは県立美術館から距離がある遠隔地のほうに、県民が当館の収蔵品を鑑賞する機会を提供するため、年に2回ほど行っております。伊那の文化会館は毎年、そして公募によって昨年度は南牧村美術民俗資料館の2か所で開催をいたしました。

南牧村美術民俗資料館では、八ヶ岳やその周辺の自然を用いた風景画を中心に、信州の原風景としての開拓の記憶をたどることを目的にと、かなり壮大なテーマで地域地域のテーマを掘り起こして移動展という形で、そのテーマに沿った収蔵品を選び展覧会として実施しております。

続きまして、交流展です。交流展も県内の美術活動の中核となる中規模の美術館と当館が共催して、それぞれの学芸員が共同企画という形で実施している事業でございます。

10月7日から11月26日まで辰野美術館ということで、両館のコレクションから辰野町、南信地域にゆかりの深い作品を中心に紹介をし、かつその間にイベントとしまして、前松本館長講演会というようなイベントも積極的に行っております。

次に当館の交流スペースでございますオープンギャラリーですが、そちらのほうで実施いたしましたのが、「みんなのアートプロジェクト」の後継事業です。実はL字型の映像作品1点ほど当館ございますが、その後継事業といたしまして、コミッションワークを「第Ⅱ期みんなのアートプロジェクト」として作成、実施いたしました。そのお披露目といたしまして、サウンドアーティストの細井美裕さん、及び映像作家の比嘉了さんによる新作、「配置訓練」というのを制作いただいて展示をしました。7月15日から9月10日まで、交流スペースのほうで展示を行いました。

オープンギャラリーでは、公開制作を行っております。こちらは作家が一定期間オープンギャラリーに通い作品を完成させ、公開するというもので、今回は長野県を拠点に活動する蓮沼昌宏さんを招聘しまして、3週間にまたぐ公開制作を行いました。そこでアーティストのトークイベントを2回ほど行い、またワークショップも1回ほど行っています。非常に立ち寄りやすい場所でございますので、フラッと立ち寄って作家と言葉を交わしていただくというようなシーンも見られたかと思います。

そして、2階にアトラボという場所がございます。こちらは4期に分けて展示をしています。第Ⅰ期は中ハシクシゲさんの視覚以外の感覚を使って、自分の犬を実際に目をつぶってつくった作品になります。

そして第Ⅱ期は光島貴之さん。この方は全盲の作家さんでございますけれども、光島貴之さんの作品を紹介しました。イベントとしましては、ワークショップ等を行っております。

第Ⅲ期としましては、廣瀬智央さんの視覚以外の感覚を使った鑑賞が可能なアトラボということで、この方はミカンの香り等を中心に、アトラボに入るとミカンの香りが充満してくる、そういったプロジェクトを、実はこの方は和歌山のほうで実施しております、その流れで「ミカンプロジェクト」を実施していただいております。ギャラリートーク等も行っております。

第Ⅳ期は金箱淳一さんの電子楽器というか、自分の下の板を叩くと前の人が振動を感じるといった楽器を開発しております、その展示でございます。

以上が鑑賞事業、展示の事業です。

続きまして学習事業、当館ではいわゆる教育普及に力を入れております。学習事業、スクールプログラム等々、学校単位で皆さんが美術館を訪れていただく、105校ほどの実績がございました。

また、出張講座としまして、信州大学病院、こども病院の院内学級、あるいは特別支援

学校を対象とした出張講座も行っております。また、学校教職員の研修会の講師として協力をしたり、鑑賞教材の貸し出しをしております。

そして次に、アート・コミュニケータ、ACと呼んでおりますけれども、美術館を拠点に、人とアートのつなぎ手として自発的に活動する方です。こちらは、いろいろプログラムはありますが、活動としては美術館主催のプログラムに参加して、お手伝いという形で参加する方、またAC自身が自主的に企画するプログラムを実施という活動もしております。

ACの皆さんも自主的にいろいろなアーティストの方のお話を聞きたいということで企画し、実施したものがああります。土を使った作品をつくるということで、ACの方々が自主的に企画をして、美術館を会場に実施したという活動もやっておるところでございます。これはACの3期生採用時の基礎講座等の様子になっております。

そして鑑賞プログラムとして、こどもアトラボ、交流スペースで子供から大人まで対象に、制作のワークショップをしています。また「おやこでトーク」といった、保護者を対象として対話型鑑賞等も実施しております。

続きまして交流事業です。地域と連携したイベントとしましては、城山小学校のアートクラブ、隣に城山小学校がございますので、クラブ時間に美術クラブをやっていただくという連携事業をしております。クラブ活動を美術館内で実施しています。

また、県内大学の連携事業。こちらは信州大学との連携事業ということで、信州大学の教育学部生を対象に、対話型鑑賞やいろいろな鑑賞プログラムを、学生さんに企画・運営をしていただく。いろいろな小道具を使って小芝居をして、子供を楽しませるというようなことを信州大学の学生さんと共にやっております。

続きまして、障がいのある方のための特別鑑賞日です。こちら昨年度2回ほど、障がいのある方を対象に休館日に開催する特別鑑賞日を実施しております。特別鑑賞日の前に、館内職員を対象に研修会、これは県の社会福祉協議会等をお願いをしていますけれども、そういった研修会等も2回ほど行っています。

ページをめくっていただきますと、調査研究事業。紀要という調査研究の冊子を発行したり、作品の保存・修復をしたり、あるいは下のほうですが、著作権の取扱いの研修を受けたりということ。そして最初にありました収集補助、購入作品の提案をさせていただいて、9点ほど提案をさせていただき、寄贈の希望の調査、手続等を117点ほどを収蔵品へとつなげました。保存品の保管も記載のとおり、貸し出しも記載のとおり実施をしているところでございます。

これが令和5年度の事業の実施状況でございます。

続きまして、令和6年度の学芸事業計画でございます。お手元にお配りした年間予定表を御覧いただきながら聞いていただければと思います。

令和6年度は企画展自体は6とありますが、最初の1は昨年度からの「春陽会誕生100年」です。

企画展2としましては、もう6月30日に終了となりましたが、生誕150年、池上秀畝展ということで、伊那市高遠町が地元の作家ということで、かなりいろいろなところから作品をお借りして華やかに展覧することができました。

企画展3はダリの版画展。まさに今実施をしているところですが、巡回展という形でし

ております。

企画展4としては、10月から、「京都細見美術館の名品―琳派、若冲、ときめきの日本美術―」ということで、これは京都の細見美術館の所蔵する重要文化財8件等を含めた日本美術の名品を展示いたします。

企画展5といたしましては、これは当館のNAMコレクションの特別展示として『自然と人間』等をテーマに企画展示室を使ってコレクションを紹介するものでございます。

企画展6としましては、来年2月から2か月間ほど、「信州から考える絵画表現の50年」ということで、長野県にゆかりの戦後の画家の絵画の作品をたどり、1995年までの50年間の絵画史をたどっているという展覧会になっております。

常設展示は、本館コレクションも5期に分けて、様々なジャンルの所蔵品を分けて展示をする予定でございますし、東山館もコレクションを5期に分けて展示をしております。

移動展につきましては、伊那と飯山市美術館、今年度は飯山市の美術館を9月末から移動展としております。

交流展につきましては、諏訪市の美術館は来年2月、絵画展と同時期に開催する予定でございます。

オープンギャラリーのほうでは、アート&リサーチ、本日も御覧いただけたかと思いますが、足立源一郎さんの登山道具やスケッチ、いろいろな資料を通して、足立源一郎という作家の紹介をしております。

その後公開制作を実施する予定で、今回は原田裕規さんという作家を招聘しております。

アートラボにつきましては、第Ⅱ期を今やっておりますけれども、「Love Stone Project-Nagano」、当館の石磨き、大きな石がございますが、そちらの作家さんの小さな企画展という形で展示をする予定です。

学習事業につきましては、記載のとおり、昨年度のようなスクールプログラム、またアート・コミュニケータの4期生を募集し実施をするという形でございます。こどもアートラボ、鑑賞プログラム、Love Stone Projectを予定しております。

そして最後、交流事業としましては、県内の美術館との交流、善光寺アトラインの事務局を担当しておりますので、そういったものであるとか、近隣大学、清泉女学院大学、そして信州大学との連携事業、善光寺のびんずる市への協力、そして障がいのある方のための特別鑑賞日、今年は8月と11月に2回ほど実施する予定です。

そしてインクルーシブ事業としまして、展覧会に関連して、対話型鑑賞等の実施をする予定でございます。

令和6年度の学芸事業実施は、駆け足になりましたが以上とさせていただきます。

○石坂次長兼総務課長

それでは、私のほうから資料15ページ以降につきまして御説明をいたします。

令和5年度の貸館の実施状況でございます。

まずしなのギャラリー展示スペースです。令和5年度全部で29件の利用がございました。日数といたしましては、トータルで172日ということでございまして、ほぼ前年と同程度ということでございます。令和4年度は28件ということで、日数的には令和4年度より10日ほど増えておりますけれども、こんな実績になってございます。

172日ということですが、これはいわゆる会期でございますので、準備期間がございます。これが50日ほどありますので、実際に稼動している日数は220日ぐらいあるということでございます。御利用いただいている団体の皆さんにつきましては、ここに記載のとおりでございます。また御覧いただければと思います。

また、次の16ページ、同じく地下に多目的ホールというものがございまして、そちらの利用状況でございます。こちらに記載のとおりであります。ギャラリーと併用で展示スペースとして御利用いただくケースが多いわけですが、それ以外には、研修ですとか交流会というようなことで御利用いただいているということでございます。全部で13件、60日の利用がございます。

次の17ページを御覧いただきたいと思います。

今年度の状況でございます。6月30日現在ということで、既に御利用いただいているもの、それから今後の予約が入っているものということで、全部で22件、147日の予定がございます。また、ホールにつきましては全部で10件、48日ということで、こちらもギャラリーと併用して御利用いただく件数では多くなってございますけれども、このような状況になってございます。

貸館事業につきましては、以上でございます。

○米山副館長兼広報・マーケティング室長

続きまして、広報・マーケティング室から御報告します。米山と申します。よろしくお願い致します。

お手元の19ページ、20ページを御覧いただき、19ページに関しては先日お話ししたので割愛しまして、20ページから説明をいたします。

現在広報・マーケティング室は、4月から1名増員で、私を含めて4名になりました。何をやっているかという、プレスリリースの作成、取材対応、SNSの配信、式典運営などの通常の広報。また、今新しく取り組んでいることとしては、リニューアルから4年がたちまして、美術館本来の機能に合わせた活動を考えています。具体的に言うと展示会だったり、美術品、館のコンセプト、ランドスケープ・ミュージアムという言葉があるんですが、それに沿った内容で展開しています。

具体的には新しい方に来ていただくということで、先日、伊那の高遠出身の池谷秀畝、日本画家の生誕150周年が今年で、伊那の博物館や美術館でも記念展をやって、それと連携して県立美術館でも大規模な展覧会をやったのですが、せっかくなので、伊那の方に長野に来てもらうということでツアーを考えました。

ツアーも普段のツアーではなくて、企画を担当した学芸員がバスに乗って、車中で、自分が担当したものと熱く語っていただいて1時間半。着いたら当館の学芸員がまたさらに説明をする。それで作品を見ていただく。最後に、この辺を観光して帰っていただくということを2回設定いたしました。これは信毎ふれあいネットという会社と一緒にやって実現しました。

これは両方ともバスが満席になりまして、合計62名でしたが、非常にこういう機会がなければなかなか来られなかったと言う方もいらっしゃって、中信や東信でもやっていきたいという内容でございます。

また、引き続きやっていることとしては展覧会広報と関連したイベント商品などを考えるんですが、ダリ版画展では当初スイーツをつくろうとレストランと話をしていたんですが、食事にしたらどうかということで、スペイン出身のダリにちなんで、パエリアですとか、スペインのデザート、これをセットにしたランチ限定でやっています。毎回限定10食ですが、毎日売り切れている状況ですので、皆さんよろしければ会期中ぜひお越しください。

それからもう一つ、資料には入っていないんですが、9月7日に3階の屋上を使ってワインのイベントを今考えています。まず夜間に開館するのでいろいろな方に来ていただくということと、美術館でオリジナルワインを今回作りまして、それをお披露目すると。それもコンセプトにあるランドスケープ・ミュージアムということで、善光寺の東側、高山村から善光寺平が見えるんですが、そこでつくったブドウでワインをつくるということで、同じ風景につながっているということを表現したいということで、そのワイナリーと今協力して準備をしています。

最後にインバウンドについて一言。昨年4月から来館者受付のところで、目視ですけれども、インバウンドらしき人をカウントしまして、昨年2500人、もっといると思うんですが、大体月に平均すると200人から300人の海外の方が来ていらっしゃるということなので、ホームページも英語化はしているんですが、多言語化を進めたいということのを企画しています。以上です。

○石坂次長兼総務課長

続きまして、修繕の実施状況につきまして簡単に御説明いたします。資料の21ページと22ページになります。

21ページは令和5年度、昨年度の施設等の修繕の実施状況でございます。何百万という大きなものはございませんけれども、建物や設備関係、細かいものになりますけれども、修繕を実施しております。

金額につきましては記載のとおりでございますけれども、建物・設備関係が40件、作品の修復関係が4件ということで、トータルで814万円あまりの修繕を実施してございます。

また22ページ、今年度6月までということですが、全部で記載の9件ということで、165万円余の修繕を実施しております。簡単でございますが、以上です。

○水上文化振興課長

ありがとうございました。

引き続きまして、議題(2)の令和5年度第1回美術館協議会でいただいた御意見に対する対応状況について、美術館から説明を申し上げます。

○堀内副館長

資料2を御覧いただきたいと思います。

昨年度の美術館協議会で委員の皆様から貴重な意見をたくさんいただいております。すぐに対応できるものとできないものもございまして、その対応状況について御説明

をさせていただきます。

まず1点目、広報のあり方について御意見をいただきました。

モニター会議やアンケートの結果をどう活用していくのかといったことや、松澤宥展や池田満寿夫展など意外と観覧者が少ない。広報活動を工夫したらどうかといったこと。常設点や展示回数を減らして、その分広報に力を入れたらどうかといったような御意見をいただきました。

当館では、来館者目線で指摘された貴重な御意見、これはできる限り反映していこうという対応をしているところでございます。また、展覧会の内容の良さと入場者が比例しないということは課題だと捉えております。松澤宥展や池田満寿夫展など、作家の生前を知らない層には SNS 等で興味を持ってもらうための画像の配信を行ったことで、若い年代層にも来館者が増えたといったことがございましたので、こういうことも、また展覧会の内容に応じて様々な広報活動を行っていきたいと考えております。

2点目の展覧会についてでございます。

そのうちの1点目ですが、重要文化財・国宝を持ってこられる博物館的な展示があってもいいのではないかと御意見をいただきました。今年度10月から、京都細見美術館の名品展を開催する予定でございますけれども、仏像だとか工芸品などの重要文化財8件を含む優品を展示予定でございます。

今後の企画展におきましても、普段目にすることができない重要美術品も展示ができるように心がけてまいりたいと考えております。

2点目の企画展につきましては、量より質の時代、質の高いアートを求める人たちに鑑賞いただけるよう勧めたらどうかという御意見をいただきました。当館美術館運営のためには、質の高い自主企画展と、ある程度人を呼びます巡回展、これを組み合わせて実施をしているという実情がございます。また、質の高いアートを紹介するということは、美術館の本質であるということを改めて心に留めて運営してまいりたいと考えております。

3点目はテーマ性がはっきりした常設展を切り出していったらどうかということでございます。本館の常設展では、同時開催の企画展と連動した展示を行っております。展示内容が明確に伝わるように、テーマ性を持った展示をこれから打ち出していきたいと考えております。

4点目は、コンテンポラリーの海外作家をどうこの県内で紹介するかというのは大きな課題ではないかといったこと。巡回というような共同開催で海外アーティストの実践を見ていただく機会があってもいいのではないかと御意見でございます。

海外作家展の実績がないというのは当館の弱いところと認識をしております。御指摘のとおり、まず巡回展から海外アーティストの展示を考えていきたいと考えているところでございます。

次に南信に住んでいても観に行きたくなるような企画展を開催したらどうか。県内各地域に寄り添う企画展、各地域の文化芸術を紹介する展示をしたらどうかという御意見でございます。

先ほども米山から説明がありましたが、今年度は5月、6月で池上秀畝展を開催いたしました。池上秀畝は伊那市出身の作家でございまして、その地元であります南信発のバスツアーを2回実施して62名に参加をいただいたということで、大変好評であったもので

ございます。このように各地域ゆかりの郷土作家を取り上げる展示は有効であると考えているところであります。

裏面を御覧いただきたいと思います。

3点目、インクルーシブについて御意見をいただきました。障がいのある方が1人でみえても、皆さんと同じように鑑賞ができる合理的配慮を実践いただき、もう一歩進んで取り組んでいただきたいという御意見でございました。

当館では、休館日に障がいをお持ちの方を招待する特別鑑賞日を年2回設けておりますが、これでは障がいをお持ちの方と健常者を分け隔てしてしまうという御意見を賜りました。今後、このような指摘を心に留めながら、どなたでも楽しめる美術館を目指して取り組んでいきたいと考えています。

次に施設関連でございます。駐車場の使い方について改善点があるのではないかと御意見をいただきました。城山公園駐車場は有料になっています。そのため、東山魁夷館の北側駐車場の利用につきましては、歩行に配慮を要する方は障害者手帳等をお持ちでなくても口頭により駐車を認めているという運用を現在はおこなっているところでございます。

また施設関連では、貸館施設等の展覧会名やポスターを掲示する場所など掲示板が少ない、案内が不足しているのではないかとといったことや、今全館でやっていること、どんな講演会があるかというのが一目で分からないという御指摘をいただきました。

館内の案内表示につきましては、デジタルサイネージの活用方法の見直しを含めまして、意匠等のバランスを考えながら随時改善を図っているところでございます。貸館の展覧会等につきましては、B版の大きさのポスターを本館1階の西側と3階の出入り口に掲示できるようにいたしまして、案内がはっきり分かるようにしているところでございます。

また、メインエントランスの掲示スペースの利用方法の見直しも実施をしたところでございまして、今後も随時見直しを行っていくこととしております。

次に職場環境につきまして御意見をいただきました。学芸員やスタッフが疲弊しないで、よりクリエイティブな仕事ができるような環境づくりが大事ではないかということでございます。当館におきましては、働き方改革の下、職員が疲弊しないように適切な業務量と業務分担を心がけております。本年度は学芸員及び広報マーケティング室に正規の職員を増員しているといったところでございまして、今後も業務の適正な分担を心がけてまいります。

6点目の霧の彫刻でございますけれども、霧の彫刻のパフォーマンスはすばらしいので、もっと多くの回数を実施したらどうかという御提案で、年1回ぐらいアーティストとのコラボパフォーマンスを検討したらどうかという御意見をいただきました。

現在の霧の彫刻は1日6回5分ずつの噴出を今年度から実施をしております。また、それに加えまして、毎月1回第1土曜日につきましては、13時30分の回に15分バージョンという長い時間帯での霧の彫刻の噴出をしておこなっているところでございます。

また、コラボパフォーマンスの件では、新築オープンの際に田中泯氏とのパフォーマンスを実施しておりまして、これは非常に多くの方の記憶に刻まれたものでございます。当館の財産にもなっておりますので、今後ともこのようなことができるように検討してまいりたいと考えております。

7点目は、近隣施設との連携でございます。近隣の善光寺様や水野美術館様など、周遊

できる仕組みづくりをしたらどうかという御意見をいただきました。年間600万人もの観光客が訪れる善光寺との連携は非常に重要だと考えておりまして、美術館への誘導を図るなど、善光寺境内へ看板を設置していただいたり、善光寺の参拝券で美術館の観覧の割引きというようなことも実施をさせていただいております。

また、周辺施設等の連携でありますけれども、長野市はじめ、善光寺平の周辺市町村にあります美術館や文化施設と協議会を設置をいたしまして、相互交流や情報交換を行っているとございます。

まだまだ不十分な対応でございますけれども、今後委員様の御意見を基に改善を随時図っていく予定でございますので、よろしくお願いいたします。

○水上文化振興課長

ありがとうございました。

議題にかかります資料の説明は以上になります。

それではこれから議題につきまして、御質問や御意見がございましたら、委員の皆様から頂戴したいと存じます。御意見、御質問ある方、挙手でお願いします。いかがでしょうか。

では、荻原委員、よろしくお願いいたします。

○荻原委員

御説明ありがとうございました。質問というより感想も含めてですが、非常に多くの事業、多岐にわたる事業をやっているということ、今年も改めて思った次第でございます。

展覧会に関しまして、やはり県立美術館ということで、長野の地域の作家ですとか歴史に触れていらして、春陽会のご紹介などありがたいなと、思うところです。そうした視点をきちんとお持ちになりながらの展覧会を前年度、そして今年度もなさっているのだなと思いつつ説明を伺いました。

先ほど職場環境というお話があったんですが、冒頭で職員の方が増えたというご説明がございました。この学芸は第一係、第二係が展覧会の事業をやっている、学習係の方が学習事業とか交流事業をやっているものと思います。他にも、オープンギャラリーとか、このあたりはどんなふうに役割分担をして、これだけ多くのことを回しているのか。それぞれの御専門でやっていることと恐らく連携しながら、より内容を深めている部分もおありかと思いますが、参考までに伺わせていただけますでしょうか。

○霜田学芸課長

当館はホームページにもありますように、鑑賞事業、学習事業、交流事業とうたっております。実は交流事業は、昨年まで交流係が担当としてあったわけですが、組織改正をしまして交流係を廃止、交流係がやっていた事業を第一係のほうに入れているというのがざっくりとした形でございます。

ですので、第一係は主に企画展の実施というか、係を分けても少ない人数でやっていま

すので第一係だけが企画展をやるというわけではなくて、第二係の人も企画展の担当を持ったり、一緒に手伝うというか一緒にやっていく。プラス交流事業と呼ばれるものも、オープンギャラリーは第一のほうが管轄してやるという形となっております。

第二係はコレクションの展示や管理ということで、学習系のほうでは学習事業プラスアートラボを実施したり、交流事業の中でも、実は地域連携とか障がいのある方の特別鑑賞、インクルーシブ事業、**Love Stone Project** といったものも担当しておるということで、一応係は分かれています、事業によっては違う係の人が担うというような、臨機応変な対応をしています。

○荻原委員

分ちがたいところが恐らくおありだろうと思うんですけども、その中で皆さん創意工夫をなさったり意見を交わされたりしながら、事業の中身を決定されていく。そのプロセスをどうなさっているのかなというところを、参考にさせていただきたいと思った次第です。

○水上文化振興課長

ありがとうございます。

その他、御意見、御質問でございますでしょうか。

石川委員、よろしくお願いいたします。

○石川委員

今日お聞きした中で、正規職員が3名増えたと聞きました。32名中15名が正規職員とあります。正規職員をどんどん増やすのはなかなか難しいのかもしれませんが、ぜひ正規職員がもう少し増えたほうがいいのではないかと思います。

それから、この32名の方がこれだけの事業を管理するというのは相当なことであって、学芸第一係、第二係の10名、学習係3名の13名、課長さんを入れて14名。それで東山魁夷館もやっていらっしゃるわけですね。仕事の質を落とさないようにうまくやるみたいな部分がないと回らないんじゃないかという感じが少しいたします。

去年も申し上げたんですけども、コレクション展があるんですけども、企画展に来た人の何パーセントぐらいがコレクション展に行っているのかなと思うんですね。わりと美術館に行って、常設展示の話をする、「そんなのどこにあるの？」みたいなことを言う人が結構多くて、コレクション展を、やっていくのだったらもう少しキャッチーなというか、見たくなるようなもの。それが今回どういう意図でやっているのか、どういう内容なのか、何か伝わるような方法はないかなということ。また、受付でチケット販売の対応も、管理的にはしっかりやられていますが、美術館に来た人に楽しんでもらって、より充実した時間になってもらう必要があると思います。委託で出しているということもあると思うので、それを要求できるのかどうか分かりませんが、ここの県立美術館だけではなくて、全体の美術館には監視的な感じがして、何となく冷たいことを感じることもあります。例えば、ちょっと余計なことをしゃべるといわけじゃないんですけども、「常設展示がありますのでそちらも寄ってください」と話しかけたり、ついでに言ってし

まうと、私は今日、あめをなめて怒られたんですね。咳が出るので、ちょっと気管支を悪くして。そうしたら、よく見えていると思ったんですが、ぱっと来て、飲食禁止ですと言って、ちょっとのどが悪いのと言ったけども、そういうことは一切駄目だと。外であめが全部終わったら入ってくださいと。若い人だったんですが言われたので、それを私は責められないかと、そう言われているからそうなんだろうと思いますけれども、ルールとそのルールの意味がというのが、人間らしい解釈というか、たまたま今日はそれは一つの例ですけれども、全体にもう少し何か県立美術館の雰囲気が温かさの部分欲しいかと、全部まとめて言ってしまいましたけれども、取りあえず思っております。

○水上文化振興課長

どうもありがとうございました。今いただきました御意見、冒頭職員体制の確保ですとか、仕事の回し方の工夫というところは御意見として承ってよろしいでしょうか。その後お話がありましたのが、常設展を見たくなるような工夫、来館者への接客態度といいますか、より楽しんでいただけるような対応ができないのか、そういうような御意見だと思いますが、よろしくお願いします。

○笠原館長

展覧会の本数がかなり多い、常設展、東山魁夷館の常設展の入れ替えがかなり多いというのは私も同意見で、美術館ですので、2年、3年後まで企画しておりますので、徐々に回数を減らし、一つ一つをもう少し丁寧にやっていくような方向で今計画しております。

常設展の特集展示も全く同意見で、かなりいろいろな常設展で特集をやっているんですが、それが目立たないということがありますので、今後も広報等で工夫をしていきたいと思ひますし、例えば今年は松澤宥の特集もございしますので、ぜひ楽しみにしていただきたいと思ひます。

それから、警備や受付、監視員とか、そういった人たちが臨機応変にしてくれればいいのですけれども、まだ2021年から役を担っている人たちでかなりまだ若いので、石川先生がおっしゃるように、そここのところで、マニュアルどおりにやってしまうということは私も感じていしますので、そこ辺のところは、美術館と委託会社といろいろ話し合いをしながら、これも少しずつだと思ひますが、お客様が不快にならないような接し方をお互いに考えていきたいと思ひます。不快な思ひをさせて申し訳ありません。以上です。

○水上文化振興課長

石川委員、よろしいでしょうか。

○石川委員

はい。

○水上文化振興課長

その他、御質問、御意見ございしますでしょうか。

小川委員、お願ひします。

○小川委員

多角的な新しい取り組みを美術館に期待しております。ちょっと教えていただきたいのは、アート・コミュニケータという事業をされているけれども、どのぐらいの応募があって、どういう方から応募があるのかということをお教えください。

○霜田学芸課長

アート・コミュニケータは、現在1期、2期、合わせて47名がアート・コミュニケータとして活躍中でございます。そして今年も4期生募集ということで、大体20名前後を目途に募集をかけておるところでございます。

募集をいたしますと、初年度は本当に150とかものすごい数の応募があったんですけども、やや落ち着きまして50前後だったか、大分落ち着きまして、かつ初年度は老若男女、10代から70代まで、男性女性もたくさんだったのですが、去年は女性がやはり多くなってきました。逆にアート・コミュニケータは男女比というか、できるだけ多様性ということを目指しておりますので、男性が非常に貴重というか、やってくれないかなという感じで考えておるところでございます。

実際50名の希望者を書類選考、その後面接を行いました。

観点といたしましては、やはり熱意がある方というのもありますし、本当に一緒に20名なりが活動していくような形ですので、非常に協調性というか、やる気もあって非常によい影響を皆さんに与えていただけるような方であるなという方を選ぶというか、選ばせていただくという形で考えておるところでございます。

けれども、ほぼほぼというか、結構皆さんやる気に満ちて応募はしてきていただいていますので、ただ、最初の百何名からだいぶ募集は減ってはきておるので、広報も、ラジオが効くという経験則で、FMながのとか、農作業をしている人がラジオで募集を聞いてはせ参じるという例が幾つもあって、面接中にもそういうことを語った方がいらっしゃるので、今のネットとかではない、違うやり方で届いた方がかえって応募してくれているという面白い状況も見られたところです。

○小川委員

ありがとうございます。選ばれた方は決まった期間活動されているんですか。

○霜田学芸課長

一応3年間という形です。

○小川委員

ありがとうございます。

○石川委員

アート・コミュニケータの方も何人か存じあげていて、とても皆さん熱心で、3年で卒業されるのはちょっと寂しいらしいんですね。でも逆に3年で卒業した人たちは地域のア

一的なイベントに積極的に参加してくださって、そういう意味では私なんかはとてもありがたく思っています。

○霜田学芸課長

まさしくアート・コミュニケータの目的というのが、美術館でいろいろ経験したことをそれぞれの地域に持ち帰って、そこで御自分が中心になってやる、支えるというのを目指しているということで、以前は卒業式も「デビュー式」という名前で地域にデビューしてくださいということで実施をした形になっております。非常にうちの学習係は力を入れてやっている事業でございます。

○水上文化振興課長

ありがとうございました。小川委員、よろしいでしょうか。

その他、御意見、御質問等ございますでしょうか。

若麻績委員、よろしくお願いします。

○若麻績委員

今日は説明ありがとうございました。今までの先生方とは違う視点から申し上げるんですけども、2ページの施設利用者数を拝見しますと、令和3年は、宮崎先生がつくられて以降、人が伸びてきて、大変大勢の方が見えるようになったということの中で、令和3年はコロナ中でしたよね。それでも78万人が来られていると。非常に新鮮な感覚で新しいことができたという効果があると思いますけれども、その翌年の令和4年はそれを上回る数字になっています。これは御開帳があったりしたことが一つ、あとジブリがありましたね。それがあったことが影響したのかなと推察しております。また、詳しいことを教えていただければと思いますが。

ただ昨年、非常に数字的に落ち込んだといってもいいと思いますが、無料のゾーンを見ても落ちていますし、有料のゾーンも落ちているということで、これについて先ほど説明いただいたいろいろな催事があったわけですが、その催事の数字を結果としてそれをどうお考えになっているかということが1点。

2点目は、私も北斎のを拝見したんですが、あのときは写真が取れて、非常に見た人がそれを自分で写真を撮って送れるという非常にいい場面があったんですが、善光寺では写真の肖像権とその写真の扱いというのは難しいものがあるんですけども、その辺の線引きをどのようにされているのか、それが2点目。

3点目は、先ほどインバウンドの話がありましたが、インバウンドは非常に増えていきます。この秋も、私の感覚ではもっと増えると思います。増えるのもいいんですが、去年の秋に比べると落ちてくると思ってしまして、善光寺もほかならぬちょっと落ちているんですが、インバウンドの方が見たときに、善光寺もやっぱり日本の中の点でしかないんですね。そのときに、あちこち回るインバウンドの観光的な視点から見たときに、この美術館として何を一番のメインにしていращやるのか。それをお聞きしたいなと思います。

○笠原館長

入館者数については詳しく後で説明しますが、企画展によって入館者数は違って、令和4年はジブリですね。本当に難しいところで、県立美術館に来ていただいてそれがリピーターになっていただくというお客様が、例えばジブリ展でどのぐらいなのか、来ていただくのはすごくいいことなんですけれども、その展覧会の中身によってリピーターになるかならないかというのは多少差がつくので、入館者数はなかなかそれだけで伸びるものではないと思います。

著作権についてですが、やはり著作権があるものについてはなかなか取材というか、写真撮影 OK というのは出しにくいというのは確かです。ただ、今かなり、著作権があってもその作家さんの OK を取るとか、気をつけてくださいということで撮影を OK することも、方向的にはそういう方向に行っていると思います。

著作権的には、個人で撮って個人で楽しむ分にはそれは OK なんですが、やはり SNS とかに載って、それがどこまで個人のものかということが分からない。非常に曖昧になってきますので、難しいところではないかと思っています。

もう一つインバウンドの話ですが、冒頭にも言いましたように、インバウンドの方たちにどうやって来ていただくかというのは一つ大きな課題になっています。プレス方法を英語で、絵画とか美術館とかそういった専門の雑誌とかそういったところにどんどん発信して、インバウンドで美術館に来たいという方向性がある人でないと届きませんので、かなり地味なやり方ですけども、ホテルにチラシを置くとか、そういうプレスリリースを海外に発信するとか、そういう地道なところから今取り組んでいこうとしているところです。

○堀内副館長

入館者数について御説明申し上げたいと思います。令和4年度は、先ほどお話があったように、ジブリ展だけで18万8,000人のお客様が入りまして、企画展のほとんどを占めていたということがあります。常設展は東山魁夷館がございまして非常に安定をしております。年間10万人前後でずっと推移をしております。

無料ゾーンのところもかなり人数が増減するわけですが、開館当初から建物を見に来ていただくお客様がいて、開館から3年ぐらいまではそういうお客様も来館されていましたが、今後は徐々に落ち着いてくるのかなという感じがいたします。

令和5年度は企画展において大きな企画展が、北斎展などはありませんでしたが、他に大きな企画展がなかったものですから、10万人をちょっと超えるという状況でございました。

令和4年度、5年度を比較しますと減ってはいますが、企画展等も工夫しながら来館者数を増やしていくことができるようにしたいと思っております。

○若麻績委員

ありがとうございます。1点だけ、インバウンド関係は私のところにもいつもうちにチラシを送ってきていただいてありがとうございます。お泊まりになられた参拝の方のところにチラシが置いてあるんですけども、外国の方もたくさん見えるんです。その方々が結局そのチラシを見ても分からないですね。これからは、QRコードでアクセスできますから、それで英語サイトとか、ドイツ語サイト、フランス語サイトとか言語サイトに行か

れるような。できればそういうメッセージ性があるものが1枚あると、それでアクセスできますので。

せっかく来られた方に、こちらに少し足を運んでもらえるようなきっかけづくりをお願いしたいと思います。

○笠原館長

ありがとうございます。すぐにやりたいと思います。

○水上文化振興課長

ありがとうございます。

小坂委員、よろしくお願いいたします。

○小坂委員

よろしくお願いします。小坂でございます。

三つほど質問させていただきたいんですけども、今、若麻績さんがおっしゃった外国人観光客の問題、これは統計はないのかもしれませんが、感じとしてこの美術館に来られる外国人観光客が相当増えているのかどうか。

私が非常に気になるのは、東山魁夷さんの作品はこの美術館の売りものだと思いますけれども、東山さんの海外での評価とか、人気というのは、どの程度のものなのかとか、さらに東山さんの作品がこれだけ集まっているということを海外に知らしめる方法はないのかなということも考えますので、そこら辺が一つ。

あと、この美術館のPRの方法として、今はSNSの影響が非常に大きいと思いますけれども、美術館自身の発信としてのSNSの利用はどのようにしていращやるのかということが2点目です。

3点目は、この美術館ができたときから、私は屋上のウッドデッキに非常に期待してまして、これは非常に名所になるんじゃないかなという感じがしていましたけれども、そのときはいろいろなイベントでも利用されるというような計画があったと思いますが、その利用状況等教えていただきたいと思います。

○笠原館長

東山魁夷の海外の評価は高いとも言えず、低いとも言えずという状況だと思います。やはり近代の日本というのは、なかなか現代美術に比べて発信力は、石川先生や荻原さんの前と言うのもなんですけれども、やはりコンテンポラリーアートのほうが目立つ状況なので、これから発信する努力は必要ではないかと思います。

○米山副館長

インバウンドの数ですが、かつてはアジア系が多かったんですけども、ここ1、2年はヨーロッパの方が非常に多く、たまに話を伺うと、霧の彫刻を見にドイツから来たとかいう方もいます。私の肌感覚としては、どちらかというとヨーロッパではどうなんだろうと思ったんですが、わりとシンガポールからわざわざ作品を見に来たという方もいて、最

近タイなども多いんですけれども、もともと中国本土とか、最近はヨーロッパが増えていきます。団体ツアーでバスで来るアメリカ人だとか、その辺もきちんと捕まえたんですが、これから考えたいと思います。

今おっしゃった英語でちゃんとした媒体というか、1枚あればこれで美術館が分かるみたいなものをこれから作っていきたいと思います。

昨年、試みとして北斎展のときに英語でポスターとつくったりしたんですが、それはだいぶはけたので、我々の能力の問題もあるので、これから笠原館長とブラッシュアップしていきたいと思います。

それから SNS 発信をどう考えているかですが、これも 20 ページの SNS のフォロワー数を見ていただくと、特に今力を入れているのが Instagram。あとはデジタルが苦手な方もいるので、そういう方に向けて紙媒体、両方一生懸命やっているところです。

かなり Twitter や Instagram も、かつては館内で回して全員の許可を取ってそれから配信だったんですが、スピードが合わないので、内容によっては早めに準備したものを出していこうという流れになっています。そのために1人そうした SNS 専門の係員というか、1人が担当して必ずやっていくと、片手間にならないようにということで努めております。

あと、3階のカフェテラスですが、非常に眺めはいいんですけれども、夏は暑過ぎるんです。日ざしがすごいです。冬は雪が降って入れないところも使える期間は少ないのですが、その期間中は中でイベントをやっていききたいと思います。

9月7日が一つの手始めで、5時半以降、誰もいない中をあえて人を集めてみようということで、そこから見る善光寺の風景が非常にいいので、あそこにガラス越しのカウンターがあるんですが、バーカウンターだったんです、宮崎さんが酒を飲めるようにつくったそうです。ただ酒を飲んでいるのではあれですから、美術館のお酒をつくりましょうと言ったら始まったので、ぜひ若麻績さんも来ていただいて、御発声をしていただきたいと思います。

○小坂委員

ウッドデッキを利用して、企業か何かがイベントをやるという話が当初あったと思うのですが、企業の利用はあったんですか。

○堀内副館長

それは今まさにこれから、収入なども含めてですが、まだルールもきちんとできていないので、そこは県の公共財産なので、使うには県と協議しながらということで、ルールづくりをしようという話は県としています。

○小坂委員

ありがとうございます。

○水上文化振興課長

ありがとうございます。

寺島委員、お願いします。

○寺島委員

今日はありがとうございました。皆さんの話を聞いていて、近くにいても全然気がつかないことがいっぱいありました。私、最近このウッドデッキの上のところが大切だと思うんです。開かれた公園、そしてランドスケープ・ミュージアムということで、あそこが公園のように使われればいいなということでお願いしたいと思うんですが。

それから、善光寺さんと一体となったランドスケープと考えたとき、一番大切なのは優しさだとか癒やしだとか、それをキーワードにできる美術館だと思うんです。石川委員さんが言った冷たいというのは、いわゆる昭和の美術館ですね。もっと温かい、あそこに立って監視しているのではなくて、何か聞かれたら答えてくれるような、そういうような、お招きするという姿勢がないと、やはりこんな美術館だからおいでと言っても民間の人は来ないですね。だから、そのところをよくお願いしたり考えて、それはまた職員の皆さんの本当の温かい輪になっていって、環境が人を決めるし、人が環境も決めるのだから、そのところは常々思っているんですが、よろしくお願いします。

それから2点目ですが、私も美術館で一番大切な一つに、学習のことを、中平さんが専門ですが、そこをうんとやってもらいたいと思うんです。やってこられた人たちや、経験した子たちに聞くんですけれども、面白かったと。おとといの新聞を見てカチンと来たんですが、学力テストの結果が文科省から出ましたね。あのときキャッチコピーが何て書いてあったかといったら、記述もそうだけでも表現力が足りないと。これからはそのために ICT を積極的にやってくれと。ふざけるんじゃないと。やはり県立美術館が目指しているような、本当に温かい癒しになるような、心が豊かになるものだから、そういうことで子供たちと、表現力というのは元来美術や音楽や、今テレビでやっている『光る君へ』のああいう作品や、今朝私ぼーっとしていたんですが、奇跡の金メダルを見てしまったものですから、ああいう四つですよ。4分野があるんですよ、高める。その中の大きな一翼を担っているんで、それをああいう単なる情報ツールをやっていこうというのだったら、それをもし美術館がどんどん進めていったらまずいんじゃないかなと。やはり人とも触れ合う、作品を通して、それから子供たちの言っていることやほかの人の言っていることがいいねと言えるような、にぎやかな空間もあってもいいんじゃないかと。

それが、無料ゾーンに行っても、みんなシーンとしているんですね。ああいうところで、もうちょっと子供たちも遊んだりしてね。そういうような、何か温かさが欲しいなということで、あとは大勢いる専門のスタッフさんがいるのだから、そこにお寺さんの心を入れてもらえればいいので、よろしくお願いしますと思います。

○笠原館長

ありがとうございます。私の仕事のかなり大きな部分が職員の職場環境を整えて、職員だけでなく、委託の人たちだったり、そういったところの職場のマネジメント、状況をよりよくして、なるべく一人一人が幸せな状況でかなりの情報を共有しながら、どうしてこの美術館で自分がここで働くという、その役割について一人一人が理解しながらそれを納得して幸せに働く、その状況を整えることが私の役目、一番大きな役目だと思っていますので、少しずつ職場のところを整えていきたいと思っています。

本当に今、委員かがおっしゃったようなことは一番敏感に反応して、それぞれのお客様が幸せになって帰っていただくには、やはり働いている人たちが幸せに働いていないとお裾分けできないので、そのところは本当に考えながら一生懸命やっていきたいと思います。

もう一つ、学習プログラムについてですけれども、学習というのは、信州全体の大事なキーワードだと思います。長野県立美術館の学習プログラムというのは、この間全国美術館会議というものがあまして私も出たんですけれども、その中でもそういった教育プログラムのコアメンバーとしてここの学芸員が切磋琢磨して、ほかの美術館の人たちと学習のあり方を学習していて、それをかなり反映してやっています。

プログラムは多いんですが、そこに参加していただく方たちもかなり多く、1名の正社員と2人の嘱託者がいてやっておりますので、そのところをかなり整理整頓しないともう無理かなというぐらいのところですので、それをうまく回しながら、教育プログラムがいかにか大事か。それはお子様だけではなくて大人もそうですので、疲れた大人のための講話みたいなものもいいんじゃないかと言っているところです。

○水上文化振興課長

ありがとうございました。

中平委員、よろしくお願いいたします。

○中平委員

今、寺島先生にお話ししていただいたんですけれども、学習事業がすごく充実しているなと思っております。「子供たちに県立美術館行った？」とか私はいつも聞くんだけれども、行ったことがあるという生徒は、ジブリ行ったとか、小学校のときに見学で行ったよという生徒が多いんですけれども、それ以外印象に残ったことがないか、ジブリ以外とか、見学する中で印象に残ったことは何かというと、アートラボをみんな答えます。やはりほかのことは覚えていなくても、触ったり感じながら見てきた作品というのは印象に残っているんだなと思います。

私は中学生が多いんですが、小学校のときに行ったそれを覚えているという生徒がとても多いので、ここでも何回もやっていただいて充実した内容だなと思っているので、ぜひ続けてほしいと思いますし、このような企画をもっと大きくやってもらえれば、子供たちにもいいのかなと思います。

もう一点ですが、アート・コミュニケータというのもすごくいい取組だと思って先ほどからお聞きしていました。これから中学校の部活動が地域移行されます。美術部が今、どこの学校もばく大な人数を抱えております。運動部よりも多く、どこの学校も一番多いのが美術部になってきている状況があり、その子供たちの部活動がなくなったときに、受け皿があるのかということ、非常にないということで大きな問題になっています。

私は昨年度まで千曲市にいて、千曲市では地域移行が進んでいて、私も進めてきたところもあるんですけれども、「アートまちかど」という美術館に協力していただいて、土曜日の制作を、そこに千曲市内の学校全部集まって部活動をする。展覧会を見たり、展示しているアーティストに指導していただいたりとかして、そういった活動をしてきていまし

たが、そこは小回りが利く地域なのでできるのかなと思いますが、県立美術館だとあまりにも大きな問題になってしまうのかなと思い、何かできないかなと考えながら、アート・コミュニケータの方々は、ある意味とても人材としては貴重な方々ではないかと思いますので、何か中学校の部活動の地域移行とアート・コミュニケータ、卒業された方がつながるといいなと思いました。

そこは仕事が増えてしまうので、美術館の仕事ではないかもしれないんですけど、どこかでそういった仕事というか、つなげられるような役割が、県レベルなのか、市レベルなのか、教育委員会なのか分からないですが、そういった卒業された方々がたくさんいるということを今日知って、何かできるのではないかなと思いました。私も考えたいと思います。以上です。

○笠原館長

ありがとうございます。美術部が運動部よりも多いというのはちょっとびっくりしました。その受け皿になるようにいろいろこちらのほうも考えていきたいと思いますし、アート・コミュニケータさんたちが3年で卒業した後に、どういう形で関わっていったらいいのかというご提案かと思います。ありがとうございました。

○水上文化振興課長

よろしいでしょうか。

それでは原田委員、いかがでしょうか。

○原田委員

いいだ人形劇フェスタ実行委員会の原田と申します。今回これで中身を見させていただいたんですが、ふと考えると、飯田から長野より近い県庁所在地は三つあるんです。愛知県庁、山梨県庁、岐阜県庁。それでこの仕事を頂戴して、知り合いにも機会があるごとにどうかとお話をするんですが、同じ展覧会であれば名古屋に行くよねと言うんです。例えば、全国を巡回する企画展でも、大都市圏でやるほうがいろいろなことが充実しているんですね。同じ企画展が長野県立美術館であって、名古屋であって、東京でもあるということになれば、飯田の大抵の人は東京か、名古屋に行くんです。

ただ、そうした状況は決して望ましい状況ではないと私も思っているんで、何か県の美術館としての意味というのを南信の人間にとっても共有できるようなものがないのかいろいろ考えるんですが、やはり一つは、出向いていただくということがすごく大事だと思うんですね。伊那でやっているというのは、すみません、私も不勉強で知らなかったんですけども、例えば飯田で美術博物館かどこかと連携をして、飯田の文化についてのもの、例えば飯田下伊那の文化について、例えば人形浄瑠璃の人形がありますよね。まだきちんと整理されていない人形、浄瑠璃の頭が山ほど飯田にはあります。それから、霜月祭り、あれのお面ものすごくたくさんある。それこそ宮崎駿さんが目をつけて千と千尋のモチーフにしたような、そういうお面がいっぱいある。あと大鹿歌舞伎の衣装だとかそういったものも持っている。

そういったものを一つ美術の観点から切り取って、例えば飯田で一つ特集を組んだもの

を長野でもやっていただく。そうすると飯田の人間にとっては、やっぱり長野県の同じ県の美術館なんだなということを感じてもらえると思うんです。そのときに、例えば、先ほどすごくいいなと思ったのはバスツアー。そういったものを組んでいただければ。かなりの関心が長野に向くのかなと思うんですね。

実は私、いいだ人形フェスタというイベントをやっている中で、今集客のことをいろいろ考えていると、実は長野県の人たちはすごく少ないです。首都圏、中京圏、関西圏からは非常にたくさん来ます。そしていろいろな広報をするにしても、中京圏の方はすごく好意的です。JR 東海さんが全駅にポスターを貼ってくれるだとか、恐らく今はそれをやってくれていないですが、中京の人たちは結構飯田に行くべきところの一つのディスティネーションとして見ている。でも、長野の人は飯田をそうは見えていないですね。飯田というと、長野の人がまず言うのは「遠いね」です。「遠いね」と言われたら、僕らはその遠いねをしょっちゅう呼ばれて来ているわけです。その感覚差がやはり決定的な感覚の違いなのかなと思います。なので、やはり出向いていただく。

例えば、飯田から美術館に行きたいという声も少なからずあると思うんです。それなりの利便性が確保されれば。例えば飯田から長野まで高速バスがあります。高速バスで来て美術館に来た方は、どちらかできながしきの割引きを受けられるとか、そういったある意味優遇措置みたいなものをしていただければ、長野の人は本当に飯田の人に来てもらいたいと思っているんだなと思ってもらえる。飯田の人間が長野に行くということ自体非常におっくうな場所なんです、長野という場所は。松本辺りまではわりとふらっとでも行けるけれども、長野は何かがないと行かないところなんです。しかもお役所絡みの何かが多いんです。

そういったところを何とかしなければいけないというのは、一番の問題意識としては1点あります。それはお互いにその辺を克服して、飯田の人間のひがみというのは絶対あると思うんですけれども、北ばかり優遇されて、税金払っているのに何で南はというのはあると思うんですけれども、そのあたりの御配慮をいただけるとありがたいというのが一つ。

それからもう一点。実は今、飯田は文化会館を新しくつくるという計画が進んでいます。市民の皆さんに言わせるとどこにできるのかとかそういうことが非常に大きな関心事ですが、そのときにちょうど県の施設である創造館が壊されるという話が出ていて、ちょうどそれも同じ時期に重なったんですね。そのときに、私はその文化会館の建設に関する委員になっていまして、会議に出ていたんですが、そこでいろいろな会議をしてはたと気がついたことがあります。我々舞台芸術の人間というのは、文化というと音楽と演劇と人形劇とか、舞台芸術の観点からしかものを見ていなかったなということを感じたんです。

創造館の問題というのは、どちらかというと美術だとか工芸だとか書道だとか、そういうことをやっている方の拠点なんですね。だから、舞台芸術と、そういういわゆる制作をするタイプの芸術、これは文化に携わっている人間の中にも一つの分断があるんだなということを感じました。創造館はああいう人たちがいるところ、文化会館は舞台芸術に絡んでいる人がいるところ。どういう文化会館が欲しいといったときに、観点は舞台芸術をやっている人間の観点しか出ていないなということを感じたんです。

でも同じ文化というものを大切にしていくためには、そういう舞台芸術の人間だけではなく、例えば舞台芸術も当然美術は必要じゃないですか。だから、そのあたりの交流がなかなかないよねということに気がついて、文化会館の中にそういった方々の一つの拠点にできるような、どうせ創造館がなくなってしまうだろうから、そういった創造館的な要素も踏まえた施設運営ができないかなと最近考えているんですけども、そういう総合芸術としての取扱いというものを、ぜひ美術館さんのほうでもやっていただきたい。

リオープンするときに、飯田の人魚姫の皆さんで、それは非常に我々としてありがたかったんですけども、ああいう形のアプローチをされるのであれば、やはり美術のほうから見ても、舞台芸術で使う美術というのは意外と見落としがちなのかなと思うんです。だから、そういったところをうまく融合していったら、総合芸術に触れられる場というのを、そういったアプローチをしていただけたらうれしいなと思います。

それからこれが最後ですが、学校の子供たちがプログラムとしてここを訪れるというのは、北信の学校が多いんでしょうか。たぶんそうだろうなと思うんです。ただ、南信の子供たちは社会見学で長野の来る場合が結構あると思うんですね。僕らが子供の頃は松本と諏訪でしたけれども、そういったときに、学校は今文化の時間を取れなくなっているのか、取らなくなっているのかよく分かりませんが、非常に限られた時間になってしまって、そういったときに、こういう社会見学だとか、今何と言うか知りませんが、そういうふうにする中で、たぶん善光寺さんにお参りして美術館を訪れる。そこでいろいろな美術に触れていただくとか、鑑賞ツアーのアプローチは学芸員さんが乗ってくださって、そこでいろいろ語りながらとか、そういうのを子供たちに対してやっていただくと本当にありがたいなと思っています。

なので、今我々も学校で人形劇を鑑賞する時間をつくってくれと言ってもなかなか食い込んでいけないんですけども、県からお達しでそういうものを充実させていくものがあるればまた違ってくるのかなと、そこが一つの切り口になるのかなと、我々にとっても切り口になるのかなと思いますので、そんなことも、南信の子供たちの誘致みたいなこともやっていただきたいと思います。

取りあえず、まとまらないですがそんなところです。

○水上文化振興課長

ありがとうございます。今3点話いただきました。一つは飯田下伊那の皆さんが、より県立美術館に心の距離を縮めるというか、アクセスしやすいような取組と。2点目が、舞台芸術と創作するような文化の交流ということで、そういった総合芸術的な観点も必要ではないか。3点目が学校の教育プログラムというか、社会見学のようなことで、南信地域から県立美術館を訪れていただくような働きかけも重要じゃないかと。

まず、私のほうから、2点目のところで飯田創造館の話がありましたけれども、飯田創造館につきましては、今年度末で閉館という方向で作業を進めているんですが、創作活動の皆さんの活動の場につきましては、南信州広域連合のほうで、既存の施設を改修して活動の拠点を移すような方向で今作業が進んでいますので、全くその活動の場がなくなってしまうという方向性で今のお話は進んでいないのですが、ただ一方で、アートの分野の組合せといいますか、そういったものでまた新たな価値とかそういうものが生まれてくると

いう観点はあると思いますので、これはまた美術館の取組もあるかもしれませんが、県としてもそういったような観点を持ちながら取り組んでまいりたいと思います。

○笠原館長

ありがとうございます。おっしゃったことはよく分かります。私も堀内副館長も茅野の出身ですので、南信の人間ですので、長野と南信がいかに遠いかというのはここに来て逆に実感しているところです。

ただ、今年ちょうど池上秀畝の展覧会が、伊那の作家さんで、それを練馬区美の学芸員の方たちと何年もかけて調査をして、県外でかなり同時多発的にやった展覧会を練馬区美から長野県美に巡回したという、これは企画展としては理想的な形でできた展覧会ではないかと思います。

そういう形でまだまだ資料を研究し調査する余地というのは、かなり南信であれ、北信であれあると思いますので、学芸員のそれぞれの専門によって調査していきたいと思います。

やはり南信の人間にとって長野が遠いというのは本当に実感していますけれども、車では2時間ですので、この間の池上秀畝のときに米山副館長が言ったように、ツアーを出して非常に好評だったということですので、そういう美術好きというのは50人や100人や200人や1,000人はいると思いますから、ツアー会社、旅行会社と相談しながら、そういう計画も立てようとしているところです。

それから、小学校の社会見学というのは、私はそこについては詳しくないんですけども、修学旅行で私も善光寺さんには行ったんですけども、信濃美術館には行った覚えはないので、そのあたりに働きかけるのはどういうふうにすればよろしいでしょうか。

○中平委員

たぶん旅行会社が入っていて、善光寺と県立美術館がセットになっている。なので、むしろ北信じゃない学校のほうが行っているんじゃないかなと思います。逆に近いところは別の場所に行ってしまうので、逆に中南信の学校のほうがこっちには来ているんじゃないかと思います。

○原田委員

つまらないことですがいいですか。さっきちょっと思ったんですが、今ダリ展でコラボメニューをレストランで出していらっしゃるという話がありました。それは、私、ここに来るまで全然分かりませんでした。今日は奥さんと来たので、何となくぶらっと館内を歩いたんですけども、歩いている限りは全然そのことに気がつかない。私は2月だったか、こういった仕事をいただいております。県立美術館の中に入ったことがないというのは申し訳ないと思ってわざわざ1回来たんです。庵野秀明展を見させていただいて、そのときにコラボメニューがあったんです。そのことも全然知らなかったです。

今、ホームページを拝見させていただいたら、レストランというコーナーはあるけれども、例えば美術館ダリ展の紹介の中にこんなコラボメニューがありますということも何もない。つくっていらっしゃるのを私もここで知ったというくらいのものであれば、大抵の

人はそれに気づかないと思うんですね。

でも、せっかくこんなことをやっているんだから、そのことを知ってもらわないのはとてももったいない話で、契約の問題もあるのかもしれませんが、せっかく中に入っているんだったら、庵野展のコラボスイーツは写真を見たら、これは絶対食べたいと思ったんですね。

去年かおとし、全国を回った水木しげるさんの展覧会がありました。あそこでもコラボメニューがものすごく話題になりました。例えば妖怪の形をしたスイーツだとか。今そういう組合せで展覧会选择する人も結構出てきているような気がするんです。

せっかくだったら、「ありますよ」だけじゃなくて、ウェブサイトを見たときに、すぐに「あ、こういうコラボレーションがあるんだ」ということが分かるようにしていただけたらなと感じました。

○笠原館長

御指摘ありがとうございました。ダリ展コラボのパエリアは本当においしいです。おっしゃるとおり、ホームページとか表示、特にホームページについては、まだまだ改良する余地がかなりありますので、広報・マーケティング室とまさに今やっているところです。

あと館内表示については、いろんなところに表示を置くと何かのデザイン的な見地で難しいということもありますけれども、そこところは綱引きをうまくやりながら、もう少し分かりやすい形にしたいと思います。

それから、先ほどの質問の中で、他分野とのコラボレーションというのも、美術館が美術だけではなく建築、漫画、ファッション、アニメ、そういったところをやり始めているのは2000年代になってからです。そういったところが他分野とのコラボレーションということでは美術館もそういう立て付けでもかなり開いていますし、それからコンテンポラリーアートの中でも、例えば中谷さんの「霧の彫刻」に田中泯さんのパフォーマンスというのは本当に歴史的な名作になりましたので、そういう現代美術だとか、近代でもそれに合うようなアーティストとのコラボレーションというのは、ぜひこれからも考えていきたいと思います。以上です。

○水上文化振興課長

ありがとうございました。

最後に、本日オンラインで御出席いただいております金井委員さん、御意見等よろしくお願いいたします。

○金井委員

オンラインから失礼します。

私は県の事業としてはアーツカウンシルのアドバイザリーボードに入っていますので、そうした立場も踏まえつつ三つコメントさせてください。

一つは、常設展の話です。前回の会議で年に六つもやる必要はないんじゃないかと申し上げました。要するに東山魁夷館の展示替えのペースに合わせ過ぎる必要もないんじゃないかと。その後1年間拝見していて、常設の変化を感じています。面白い内容や展示構成

が増えていますね。

それとも関わるんですけれども、例えば、研究紀要も非常にコンスタントに出版されていて、そうした研究活動と常設展がきっちりと連動していくようなことも良いモデルになっていると思います。学習という信州っぽいところが、学芸員の皆さんの活動のなかでも発揮されると、ますます長野県立美術館らしさが出ます。これが一つです。

二つ目ですが、令和5年の修繕の中でお示しになっていた作品の修復です。その中に石井拍亭の有名な作品がありますね。40万円の費用の修復の内容が気になりました。ともあれ、そういった修復がきっちり行われているということ自体、とても大事なことだと評価したいと思います。

つまり何を申し上げたいかというと、この手の修復活動は、修繕活動であると同時に研究活動だと思いますので、予算的な面でも、ここもますます手当がされて、必要な修復がしっかりなされるような仕組みをお考えいただけるとすごくいいなと思いました。

最後です。令和6年、今後の展覧会の展開として、企画展を「自然と人間」といった内容で御説明いただいた。それから、登山をめぐる展示だとか、あるいは風景に対するリサーチであるとか。要は非常に環境志向が強い展開を今年度なさるようです。とすると、アーツカウンシルの動きも含めてですが、気候危機に対してアクションするという県の施策本体と、この館の企画の方向性が合致していると思いますので、そういったアピールもぜひお願いしたいと。それと同時にこの県立美術館のリニューアルオープンの最初の展覧会が、まさに人と自然をめぐる展覧会だったということも思い出されるべきです。その経験や成果をどのように更新していくのかということも今年度の「自然と人間」をめぐる企画展Ⅴの注目点のひとつであると期待します。以上三つほどコメントを差し上げました。御参考にしていただければ幸いです。

○霜田学芸課長

金井委員さん、貴重な御意見ありがとうございます。

最初の紀要の調査研究を基に展示するというのは、実は小さな部分ですけれども、今年度足立源一郎展がまさにそういう形です。足立源一郎を調べ、山岳画家というところに非常に引かれ、その資料等を今オープンギャラリーのほうで展示をしています。前年度紀要に文章を書いて、今年の夏に資料等の実物を展示をして分かっていただくというか、そういった非常に立体的な展示というか、研究の発表みたいな形になったかと思います。こういったことも、学芸員として必要になってくるかと思います。私たち学芸員自身も力がついて、よりよい展示にもなっていくのではないかと感じております。良い御指摘をいただきましたと思いますので、努めてまいりたいと思います。以上でございます。

○水上文化振興課長

ありがとうございました。

全ての委員の皆様から御意見を賜うことができました。大変申し訳ありません。予定時刻を大分超過してしまいました。意見交換につきましては、ここまでにさせていただきたいと考えております。

その他、何か事務局からございますでしょうか。よろしいですか。

ありがとうございました。本日は、委員の皆様方から大変貴重な御意見、御提案、御助言をいただきありがとうございました。県といたしましても、美術館、長野県文化振興事業団一丸となりまして、皆様に親しまれる美術館を目指して一層努力をしまいたいと存じます。

結びに、笠原館長から一言御挨拶をお願いします。

○笠原館長

忌憚のない御意見本当にありがとうございました。皆さんが一番の美術館の応援団、それからちょっと厳しいアドバイザーだと思っていますので、年に一度だけではなくて、ここに私がおりますので、担当者は忙しいですので、ぜひ来ていただいても、電話でもメールでも何でもいいですので、何かありましたら直接にぜひお訪ねください。お茶をいれて待っております。本日は本当にありがとうございました。

4 閉 会

○黒岩係長

ありがとうございました。

以上をもちまして「令和6年度第1回長野県立美術館協議会」を閉会いたします。

本日は、御多用中のところ御出席いただきましてありがとうございました。